



TITLE:

北部ヴェトナム紅河平原における 輪中型堤防形成に関する試論

AUTHOR(S):

西村, 昌也

CITATION:

西村, 昌也. 北部ヴェトナム紅河平原における輪中型堤防形成に関する
試論. 東南アジア研究 2007, 45(2): 184-210

ISSUE DATE:

2007-09-30

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/53879>

RIGHT:

北部ヴェトナム紅河平原における輪中型堤防形成に関する試論

西 村 昌 也*

The Formation of Enclosed-type Dykes in the Red River Plain

NISHIMURA Masanari*

The present Red River plain in northern Vietnam is a dense distribution area of the enclosed-type dyke system, in which several settlements are surrounded by dykes within a limited area. This type of dyke is similar to Japan's Waju (輪中) dyke but often on a larger scale. Vietnamese historical documents record the construction of unenclosed horse hoof-shaped dykes after the tenth century in this area, and enclosed-type dykes were already present in the nineteenth century.

This study considers the early formation of enclosed-type dykes. Archeological research in Bach Coc, Nam Dinh, and several other locations in Hanoi, Bac Ninh, and Hai Duong has confirmed several common features of settlement formation around the seventeenth century. First, settlements inside the dykes were expanded in space and heightened in altitude through the heaping of soil, which was frequently observed in the lower area inside the dyke. Second, settlements outside the dykes were also heightened by heaping soil or flooding deposits, and some settlements on the dyke lines or outside the dyke were abandoned. I argue that these changes resulted from the construction of enclosed-type dykes with sluice gates and that this formed the present landscape of densely habitated villages within limited areas in this region.

Keywords: Waju-type dyke, Red River Plain, seventeenth century, settlement formation, heaping soil, communal land system, ceramic production settlement
キーワード: 輪中型堤防, 紅河平原, 17世紀, 集落形成, 盛り土, 公田制, 窯業集落

I は じ め に

北部ヴェトナムの紅河平原(図1)は, 低平な自然堤防と後背湿地の複合体やデルタが地形の大部分を占める。従って, 夏の雨期にしばしば冠水を被る地域であり, 豊富な水源を利用して先史時代より水稻耕作地帯として発達を遂げてきた。洪水防止と水稻耕作のための水防・水利は, 古来より国家から家族レベルにいたるまでの関心事であった。

* NPO 東南アジア埋蔵文化財保護基金; Foundation to Safeguard the Underground Cultural Heritage in Southeast Asia, No.16, Ngach 1/54, Ngo 1, Au Co, Nghi Tam, Ho Tay Dist., Hanoi, Vietnam

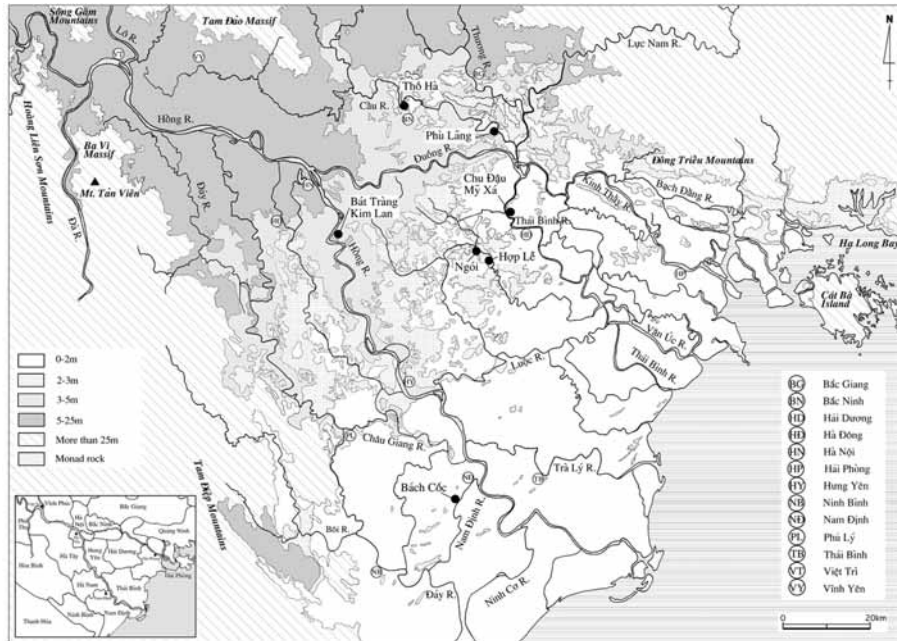


図1 紅河平原等高分布図と文中言及遺跡の位置
出所：筆者作成。

現在、当平原を空から見渡すと堤防が網の目状にめぐらされた地帯となっていることがよくわかる。なかでも紅河本流やダイ川下流域のハタイ（Hà Tây）省南部、ハナム（Hà Nam）省、ナムディン（Nam Định）省、タイビン（Thái Bình）省などは輪中型堤防（懸廻堤）がひしめき合っている [Gourou 2003: Fig. 12]。¹⁾ 日本の濃尾平野などの輪中地帯と比べ、範囲規模の大きい輪中（図2）がひしめき、輪中型堤防形成に至る深い前史を想像させる。当平原の堤防形成については、これまで地理学と歴史学からの研究が中心であった。フランス植民地期に紅河平原で人文地理研究を行ったグルー [ibid.: 75-84] は水文環境のなかで、当地域の輪中型堤防の特徴を捉えると同時に、文献史料を使ってその前史を探ろうと試みている。

桜井 [1987a; 1987b; 1989] は、『大越史記全書』『安南志原』などの史料の歴史地理的研究において、陳朝期（1225-1400年）に、大規模な堤防（鼎耳）の建設が始まり、後黎朝期（1427-1789年）には、堤防網はほぼ完成したと判断し、さらに、阮朝期（1802-1945年）にタイビン輪中などの巨大輪中が成立したと考えている。同氏以外に、いまのところ北部ヴェトナムの堤

1) 輪中は閉鎖型（懸け廻し式）堤防に囲まれた地理空間、社会を意味するもので、堤防自体の用語としてはふさわしくない。本論では、一定の囲い込まれた空間を創造する閉鎖型（懸け廻し式）堤防を輪中型堤防と仮称しておく。

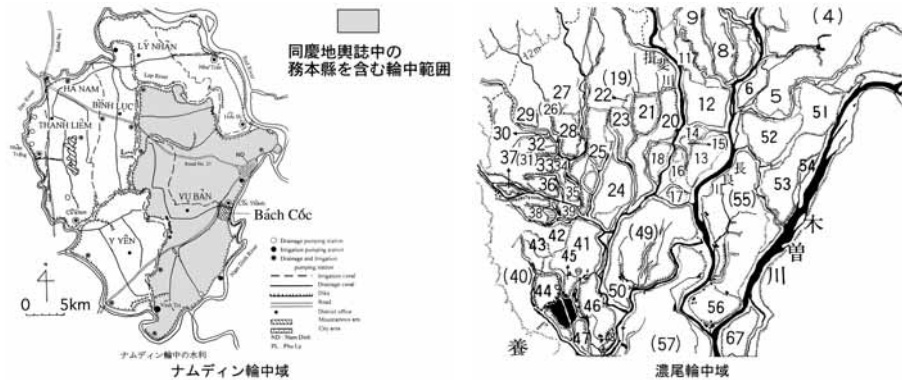


図2 ナムディン輪中域と濃尾輪中域（同一縮尺）

出所：[河野・柳澤 1996]（左），[安藤 1975: 国島秀雄作成]（右）。

防形成過程を体系的に論じたものはない。²⁾ 桜井の議論では、陳朝期に建設された堤防は、宋代の江南デルタに出現した大型堤防と同様な非締め切り型の馬蹄形堤防と考えられており、阮朝期の平原下流域に造られた完全締め切り型巨大輪中との間には、堤防進化史上のギャップが存在する。日本の輪中型堤防の発展史 [e. g. 安藤 1975; 1988] にみられるような非締め切り型堤防から締め切り型（輪中型）堤防への進化段階（図3）を見いださなくてはならない。

本論考では、筆者が近年調査してきた輪中地帯における集落形成に関する考古学的研究から発展させ、輪中堤防形成年代や集落成立との連関性などについての試論を提示したい。

II バックコック集落とその周辺の考古学研究より

紅河平原下流域のナムディン省ヴバン（Vụ Bản）県タインロイ（Thành Lợi）社のバックコック（Bách Cốc：旧百穀村）集落と周辺（図4）で、筆者はバックコック学際研究チームの考古学担当として、1996年から2002年にわたって小規模発掘と表面調査を行い、集落形成史を明らかにしてきた [西村他 1998; 2000; 西村 2006b; 2006c; Nishimura and Nishino 2002; 2006; 西

2) ヴェトナム人による堤防史研究 [e. g. Phan Khánh 1981; Đỗ Đức Hùng 1997] は堤防建設や治水関連記事をたどるのみで、堤防体系の進化論提示に至っていない。また、陳荆和 [1988: 250-255] は、後述の『国朝詔令善政卷之七』や『大南会典事例』の記述から鼎耳が、水門を備えた輪中型堤防であると想定している。しかし、これらの記述は陳朝期に活発化した堤防（鼎耳）建設が、黎朝後半期や阮朝期まで、形態や構造を変えずに続いていたという想定に基づいており、堤防進化史的視点からは適切ではない。また、史書の記述から阮朝の河政官自身、陳荆和氏と同様な考えを有していたと窺える。筆者は、鼎耳は、ヴェトナム人研究者が訳すように、鼎や鍋の耳の形をしたものとし、それは馬蹄形輪中に他ならないと考える。

西村：北部ヴェトナム紅河平原における輪中型堤防形成に関する試論

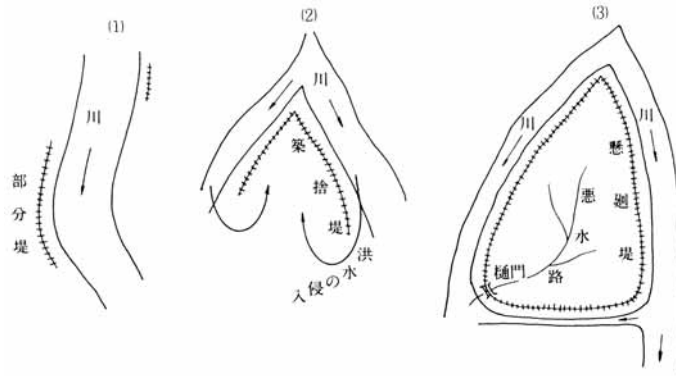


図3 輪中の進化モデル

出所：[安藤 1988: 19]。

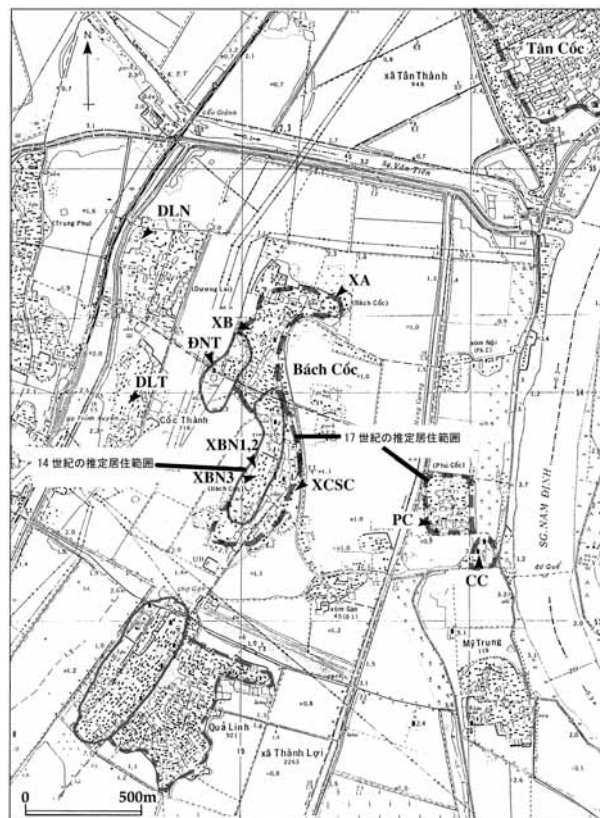


図4 バックコックと周辺

出所：筆者作成。

注：ローマ字略称は試掘地点。

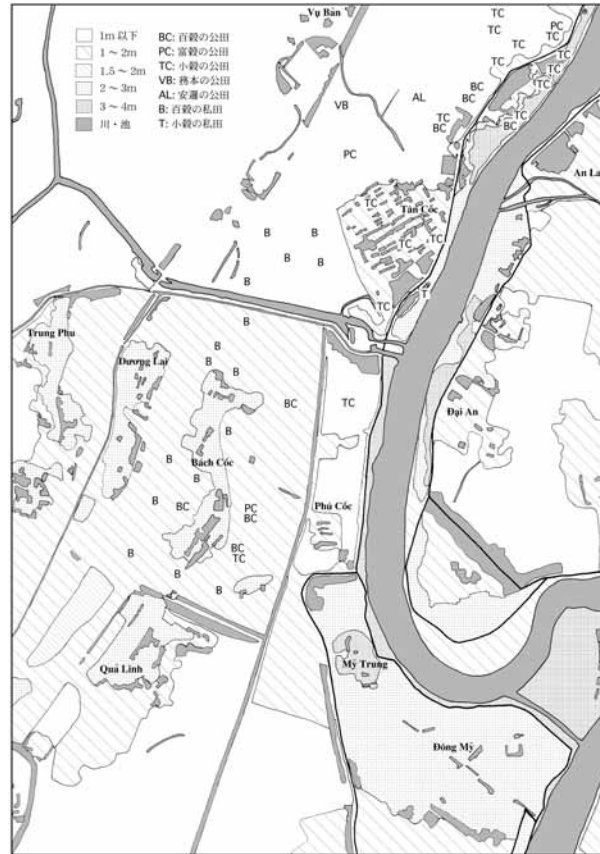


図5 バックコックと周辺の高度分布，並びに過去の公田と私田分布状況
出所：筆者作成。

野・チンホアンヒエップ 2006]。

バックコック集落は紅河右岸からナムディン川右岸地域にかけて形成されたナムディン輪中の東南縁に位置している（図2）。等高線分布図（図5）から明らかなように，バックコック集落は海拔1-2mの微高地帯に位置している。春山〔1999〕による地形形成研究（図6）では，バックコック集落は旧河川のコック（Cốc）川沿いの自然堤防上に位置し，自然堤防列の南側にはクアリン（Quả Linh: 旧果霊社）集落が，西にはズオンライ（Dương Lai: 旧陽来社）集落が旧海岸線で発達した砂堆列上に位置している。これらの集落は微高地である自然地形に沿うプランを呈するのが特徴である。また，バックコックの東にはフーコック（Phú Cốc: 旧富穀社）集落が，北側にはタンコック（Tân Cốc: 旧小穀村）集落が位置している。後2集落ともに方形のプランを呈し，家々が整然とした列をなし，池が家の周りに多く分布しているのが特徴である。

バックコック集落5地点，ズオンライ集落2地点，フーコック集落1地点の発掘調査と，各集

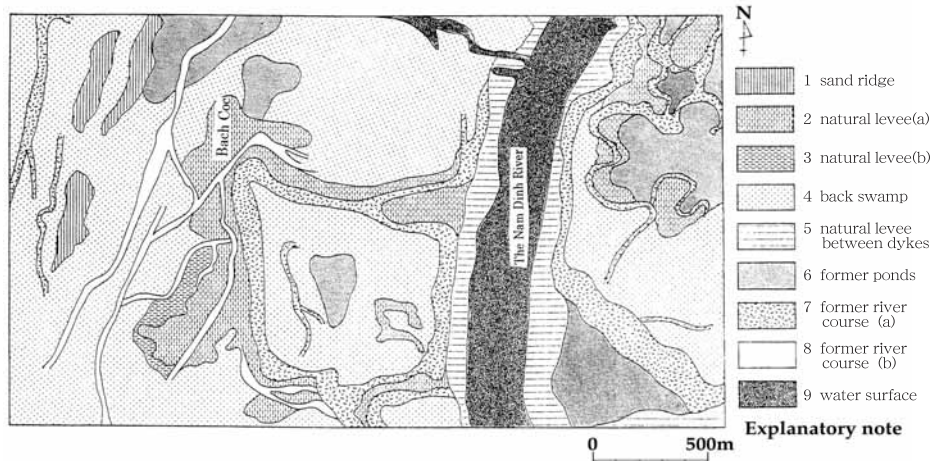


図6 バックコックと周辺の地形分布

出所：[春山他 2000]

落での表面調査から以下のような集落形成史が明らかにされている(図4)。現バックコック集落中央西部とズオンライ集落はともに居住開始は10世紀以前に遡り、13世紀以降安定した居住が行われる。17世紀以降になると、バックコック集落やクアリン集落の居住範囲が西側を中心として拡大し、特に両集落の西側で新たな集落域の拡張が行われる。同時に現フーコック集落と現タンコック集落での居住も開始される。フーコック集落のPC地点とバックコック集落のXCSC地点の発掘坑では、盛り土が堆積層の大部分を占め、その開始時期を前者は17世紀、後者は18世紀に比定可能である。同様な現象はバックコック集落のXB地点でも確認されており、17世紀以降の集落は、盛り土により居住面を高レベル化していたことが理解できる。

こうした発掘結果から得られる家屋と周囲地形の関係は、図7-Aのように略図化することができる。つまり、低湿な土地に池を掘り、その掘り上げた土でマウンド状に盛り土をし、その上に住居を築くものである。グルー[Gourou 2003: 231-234]は、盛り土上に住居を築き、家と池が、まばらかつ整然とした分布を見せるフーコックやタンコックのような集落を、ハットモン(Hát Môn)型集落と呼び、大河床域に小さい輪中をつくって立地するパターンを見いだしている。ちなみに、彼はこうした形態の集落の居住史が比較的新しいことも見抜いている。

この盛り土マウンド上に家を建てる現象は、日本の濃尾平野や荒川流域の輪中地域でも「水屋」「水塚」などとして報告されている[安藤 1975: 178-210; 佐藤他 1987]。日本の事例研究では、このような建築現象は輪中内でも悪水が滞留しやすい低湿地域に多く見られる。これは輪中内の排水機能が滞ったときに、滞留する悪水による浸水から逃れるためである。盛り土を1m以上行って、石垣で固めた堅牢なものが多いが、その性格・機能は上述したナムディン輪中内の盛り土住居と何ら変わりはない。また濃尾輪中地域では、堤外地での盛り土住居[安藤

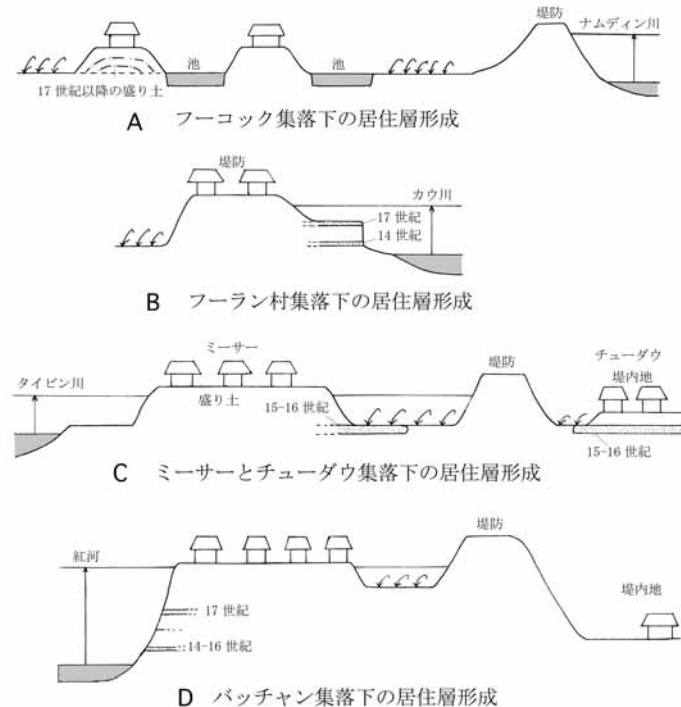


図7 各遺跡・集落での居住文化層・盛り土層形成モデル

出所：筆者作成。

1975] も報告されているが、この問題は後で触れたい。

先述したように、タンコックやフーコック集落は周辺地域に比べ、最も低平な地域（海拔標高1m以下）に囲まれて立地している。そして、タンコックとフーコックの間には Vn Tién（ヴァンティエン）川という、排水と灌漑の両機能を備えた水路が走っている。ところで、19世紀末に編纂された地理誌『同慶地輿誌』の務本縣圖（図8）では、各縣単位で社などの行政単位と道路や川との位置関係が描かれている。そして、バコックが所属する務本縣は、大安縣の一部、美祿縣、上元縣などとともに一つの地理範囲として認識され、その範囲の内縁を道が囲っている。これは、ひとつの輪中型堤防単位とその上を走る堤防道を示していると考えられる。この地図上の各社名を現地図で対応させると、現在のナムディン輪中のほぼ東半分（図2）、つまり現行政区分のナムディン市、ヴァン県、Mỹ Lộc（ミーロック）県に相当することが理解される。つまり、19世紀末にはかなり広大な面積での輪中が成立していたのである。また、務本縣圖では、百穀社（百穀社に所属した小穀村の位置を表していると判断される）と富穀社（現フーコック集落）の間に渭川（現ナムディン川）に注ぐ河川が描かれており、現ヴァンティエン水路の祖形が19世紀にはすでに存在したと理解できる。

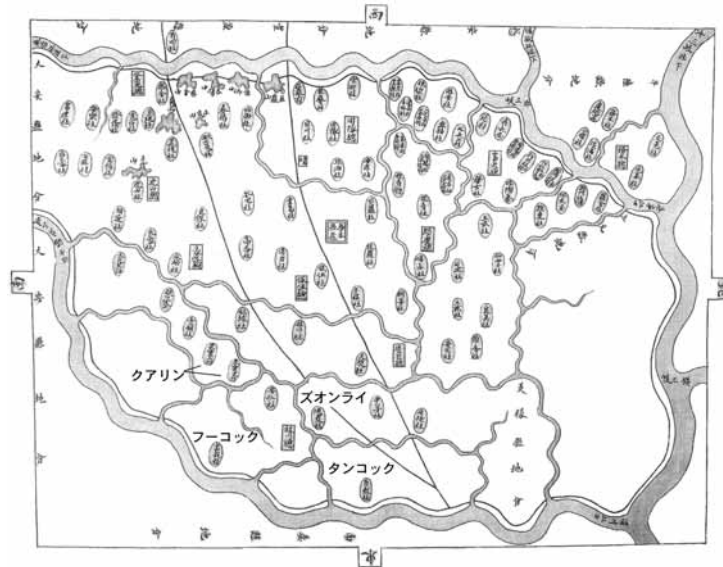


図8 地理誌『同慶地輿誌』の務本縣圖

出所：[Ngô D. T. *et al.* 2004: A. 537/12, f 46]

ところで、このバックコック集落（旧百穀村）、フーコック集落（旧富穀社）、タンコック集落（小穀村）が位置する地域は19世紀に残された地籍簿分析[桜井1987a:第六章]と、そこに記載された田地名の比定研究[中沢1997]で、水田を中心とした耕作地や宅地などの非農業地の利用形態の具体的復元が可能である。

耕作地に関しては、社会主義革命以前のヴェトナムにおいて、水田耕作地には主として公田と私田の区別が存在した。公田は国家所有のもと、村落が割り振り分配を行うもので、私田は個人に所有権が帰するものである。そして、村落によって、公田比率が高い村と私田比率が高い村といった違いが生じている。

富穀社と小穀村の場合はほとんどが公田で、百穀村では逆に、公田比率が40%を越えない。しかし、この地域を俯瞰すると、上述3村の公田比率が突出していることが理解できる[桜井1987a: 302]。そして、中沢[1997]の田地比定によれば、これら3集落の公田は、バックコック集落から東側のナムディン川までの一帯、タンコック集落とその北側、現堤外地を含む一帯の低位地域にほとんどが集中していることが理解できる。³⁾ また、タンコック北側の公田地域には百穀、小穀、富穀以外にも、務本社と安邏社の公田も分布している。

3) 中沢[1997]による田地名比定では、かなりの小穀村の公田が現タンコック集落の北東にある堤外地に位置している。堤外地での稲作は、雨期の大増水により基本的には乾期しか不可能であるから、十月稲の公田としては存在が不可能である。筆者は、こうした公田は、地簿編纂時には堤内地に位置しており、その後河道変化に伴う堤防移動により、堤外地化したと考える。

そして、考古学による集落形成史を重ねると、集落形成史の長いバックコックは公田比率が相対的に低く、集落形成史の浅いフーコックとタンコックは公田比率が高かったことが理解できる。

紅河平原の伝統的稲作の場合、陽暦の6-7月に収穫する五月稲（夏田）と11-12月に収穫する十月稲（秋田）の作付け選択が行われていた。そして、各地簿（1805-89年の間に編纂）によると19世紀段階の富穀社、小穀村、百穀村全てにおいて、公田（低位地域）は秋田、つまり十月稲が栽培されていたことがわかる〔桜井 1987a: 264〕。

しかし、バックコック集落やフーコック集落の古老〔Sakurai 2002: 90-91〕、ならびに省、県、合作社の水利担当者からの聞き取り調査〔河野・柳澤 1996: 18〕では、1960年代のヴァンティエン水路のポンプ場稼働以前、つまり20世紀半ばにおいて、当地域は雨期の高水位が原因で、五月稲（夏田）のみの一期作であったことが明らかである。従って20世紀前半頃に、低位部で十月稲（秋田）から五月稲（夏田）への作付け転換が起きていることになる。この転換を引き起こした理由は1920-30年代の大型堤防の建設と考えられている〔Sakurai 2002: 91〕。しかし、これは以下の理由から説明として適切ではない。

『同慶地輿誌』の務本縣の記述では、夏田は少なく秋田が多いことを伝え、南定（ナムディン）省の全体記述でも、同様の作付け傾向を記し、その原因が秋から冬にかけての潮水進入にあることを伝えている。つまり、冬季は乾期の水位低下により、感潮時に堤防外からの潮水進入が容易になり、低地では乾期に塩害のため水稻耕作ができないことを意味している。低地の秋田を夏田にするには、密閉可能な水門と排水・灌漑設備を整え、潮水進入を遮断して冬春期の灌漑を行わなくてはならない。堤防の巨大化は水防上の堅牢さを保証しこそすれ灌漑・排水の性格を変えるものではない。

Dumont [[1935]1995: 232] が下流域の感潮域で報告する1920-30年代の伝統稲作法などを参照して当地域の19世紀末以前の稲作を類推すると、乾期の五月稲の場合には低位部で、水門を開け潮汐利用の灌漑を行っていたのではないか。そして、雨期には堤防を締め切り、高位部で苗代育成を長期で行い、稲の背丈を高くしてから低位部へ移植するか〔*ibid.*〕、禾の高い品種を利用するなどして、高水位に対応していたのではないかと考える。また、河水面自体もさほど高度化しておらず、洪水期以外は排水も比較的容易であったのではないだろうか。

ところが、阮朝期から仏領期を通じて行われた堤防強化政策は、堤外地の沖積を活発化し、天井川化などの弊害を引き起こし、河水面が圧倒的に水田面より高くなったと考えられる〔e. g. Đỗ Đ. H. 1997: 278〕。そのため、ある程度行えた雨期の輪中内排水も不可能となり、乾期の五月稲（夏田）へ転換せざるを得なかったというのが筆者の類推するシナリオである。

ところで、19世紀末から20世紀初頭以前における当地域の公田地帯は、雨期の高水位に対応した稲作であり、夏期増水時の浸水危険にさらされていたことになる。しかし、桜井〔1987a:

251-297] は 1422 年から 1786 年までの史書記載の災害分析から、夏期の洪水発生率が高いにもかかわらず、干ばつの危険をもつ五月稲（夏田）より、十月稲（秋田）の生産の方が圧倒的に安定していることを述べている。この議論に関しては、農業被害の記録回数比較にもとづく桃木 [1991] の反証的批判も行われており、その是非判断は難しい。いずれにしても低地の十月稲栽培の場合、堤防建設による河川氾濫からの水田防御は必須のことであり、低地域を保護するには馬蹄形輪中のような非締め切り型堤防では対応できない。完全締め切り型の輪中型堤防が必要とされる理由がここに見えてくる。フーコック、タンコックの現集落の成立が輪中成立を機とした 17 世紀とすれば、周囲の低地域の開発（あるいは大公田地帯の成立）も、その時期が上限と考えるのが妥当であろう。

ただし、留意すべきことはフーコック並びにタンコック共に、現在の集落が旧集落から移動した可能性が高いことである。これは富穀社が、崇庚 8 年（1573 年）の百穀社の香盃庵碑に登場しており [桜井 2000: 271-272]、タンコックに関しては、その前身である小穀村が百穀村から陳朝期に分村した伝承 [Bùi V. T. 1997: 1-2] を持つことから、17 世紀以前に両村が集落として存在していた可能性がある。両者とも、ナムディン川の川べりに位置しており、その河川流路変更に伴い集落の位置が変更されるのは十分に想像できる。春山他 [2000: 11-12] の地形・地質分析では現在のナムディン川はかなり新しい河道で、バッコック集落とフーコック集落の間に旧河道を見いだしている。従って、考古学的知見を考え合わせると、17 世紀の盛り土による現タンコックとフーコックの造成は、ナムディン川の河道変化に伴うもので、おそらく現集落よりさらに東側に位置していたタンコックやフーコックの旧集落が放棄され、西側に再立村された可能性が高い。さすれば、富穀村に全く私田がなかったこと、また小穀村には集落最南端の堤外地にしか私田がなかったことなどは、河道変化による旧集落域の喪失が旧来からの私田としての土地所有を不可能にしたか、あるいは減少させた結果と解釈できる。そして富穀・小穀・百穀を主とした各村・社協力により行った堤防建設により、ナムディン川沿いの堤内地低域を田地化し、公田分給を行ったのではないだろうか。⁴⁾ さらには、既存の集落に付随する耕作地が多かったバッコックの場合、従来の耕作地が私田であったため、タンコックやフーコックに比べ、相対的に公田比率が低くなったと理解すべきであろう。公田地帯の成立自体、フーコック、タンコックの現集落成立や輪中型堤防建設と密に絡んでいるのである。⁵⁾

4) タンコック社とその北側に百穀、富穀、小穀、安邏、務本各社、各村の公田が分布する状況（図 5）は何を意味しているのだろうか。筆者は、堤防建設を負担し、それに伴う低域での新田地造成と新田分給に参加した集落を表すと考え。上述の集落は全て、ナムディン川沿いとその西側の後背湿地を多く抱える集落だからである。

5) 頻繁なる破堤水害を受ける越後や福井の低地では土地の割替え制が発達し、特に、越後平野の割替え制は村請け型の開拓地域に集中している [桜井 1987a: 62-65]。バッコック周辺やキムランなどの公田化問題も同じような文脈で考察されるべきであろう。

III 紅河平原他地域からの知見

前述したナムディン省バッコック集落周辺以外に、紅河平原の集落と堤防形成の関係を考える上で興味深い事例を紹介したい。

III-1 チューダウとミーサー

ハイズオン省ナムサック県タイビン川左岸のタイタン(Thái Tân)社チューダウ(Chu Đậu)村とミンタン(Minh Tân)社ミーサー(Mỹ Xá)村は、現在、堤防を挟んで、堤内地と堤外地の関係にある。堤内地のチューダウは海拔標高1.25 m以上のところに立地し、堤外地のミーサーは2.5 m以上のところに立地している(図9)。

両集落ともに、15-16世紀の陶磁器生産を行った窯業集落であったことが考古学調査で確認されている[Tăng B. H. 1999]。チューダウ村の場合、現集落の直下に窯址が確認されているが、窯址本体は現集落の表土面(居住面)とさほど変わらない高さに位置し、窯が操業してい

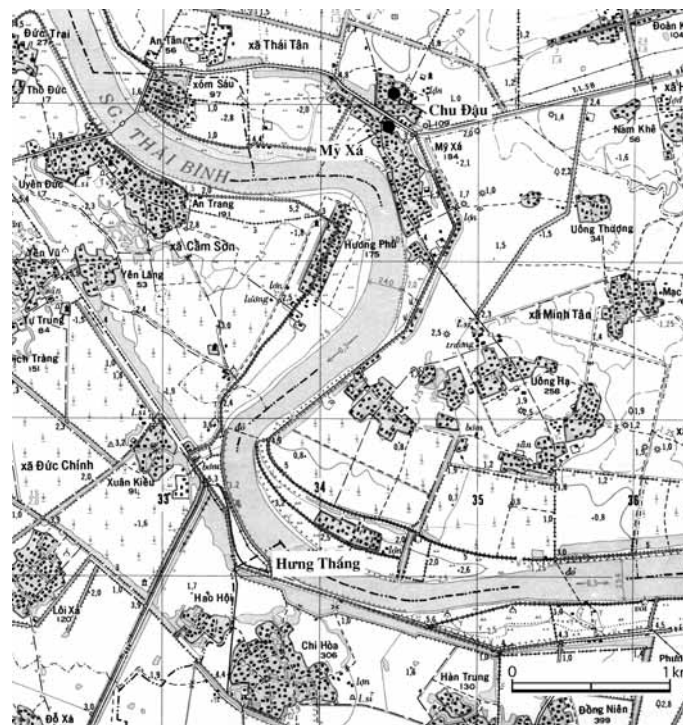


図9 チューダウとミーサー集落

出所：筆者作成。

た時の居住面はより低いレベルにあったこと、17世紀の分厚い盛り土が、居住面の高レベル化と面的拡大をもたらしたことが確認されている [Bui M. T. *et al.* 2003: 筆者踏査資料]。

ミーサーでは現集落から外れた堤防側の水田面で、窯址やその灰原が確認されている。そして、こうした窯業操業時に形成された文化層の上に、現集落が依拠する盛り土による高みが形成されている。文化層に含まれる遺物は15-16世紀の陶磁器生産時のものと、17世紀の居住活動により残された陶磁器である。前述の高みは集落下の水田面と比べ、2.5-3mほどの比高差があり、チューダウの現居住面よりかなり高くなっていることがわかる。従って、15-16世紀の窯業生産が終焉をとげ、17世紀初頭以降に、チューダウとミーサーの間に堤防が形成され、ミーサーが堤外地化したことにより、雨期の高水位に対応して、集落居住面を盛り土により高くしたと理解できる。

地元住民の言い伝えでは、過去、チューダウとミーサーの北縁に旧ケーダー川が流れており、水路として残存し、堤防と交わる場所では水門があったが、近年、水路、水門ともに埋められたという。現在、チューダウ側の旧ケーダー川脇では15-16世紀の陶磁器が大量に採集できるし、Xóm Bén (ソムベン) という船着き場としての旧地名も残っている。従って、15-16世紀段階においてこの旧川は、船が行き来するほどの河川規模を保っていたと考えてよい。おそらく、その後の堤防建設に伴い、河川が堤防内の水路と化し、水量の低下による規模縮小化へと徐々に向かったと考えられる。

以上の事象より導けるチューダウとミーサーの景観変化は以下のようなものであろう (図7-C)。15世紀、ケーダー川とタイビン川が交差する南側微高地 (自然堤防) を利用し、陶磁器生産がはじまった。当時はまだ本格的堤防建設は始まっておらず、両集落ともに居住地面の比高差は生じていない。16世紀末あるいは17世紀初頭には両集落とも陶磁器生産が終焉を遂げるが、盛り土による集落の高レベル化と面的拡大が顕著となる。特に、ミーサーの高レベル化は堤外地適応のそれであり、ミーサーとチューダウ間に堤防が建設されなければ、起きなかった現象である。そして、この堤防建設が集落居住面の盛り土時期と重なると考えてよい。

III-2 ビンザン窯址群

ハイズオン省ビンザン県のサット (Sặt) 川、ドーダイ (Đò Dáy) 川沿いには、15世紀から20世紀にかけての窯址が集中して分布している。ホップレー (Hợp Lễ), バートゥイ (Ba Thuỷ), カイ (Cây), ゴイ (Ngói), ラオ (Láo), ヴァンド (Vân Độ) の各集落で窯址が確認されており、ヴァンド以外は全て、右岸に位置している (図10)。注目すべきは、ホップレー、バートゥイ、カイ、ゴイ、ラオは、現堤防外に位置していることである。

ここでは、考古学調査に基づき、窯業生産の時期的分布を確認する。

ホップレーは15世紀から17世紀末か18世紀初頭にかけての窯業生産が行われていたこと

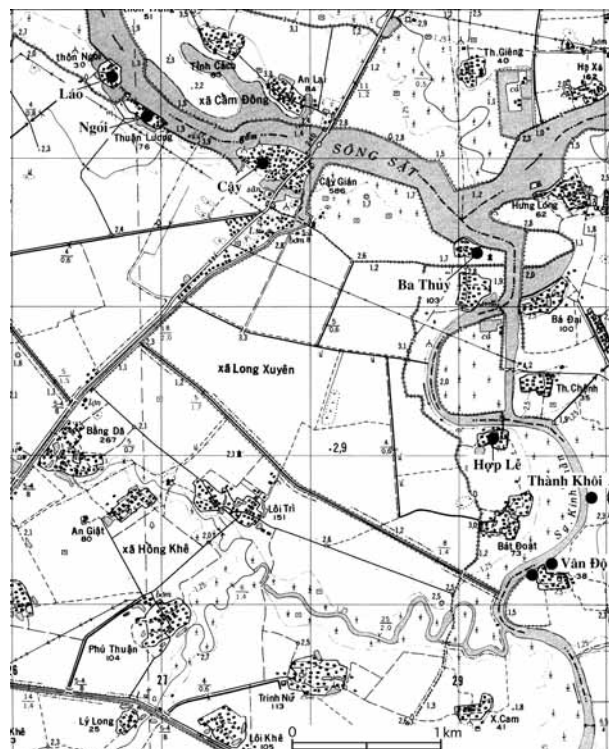


図 10 ビンザン窯址群

出所：筆者作成。

が大規模な発掘で確認されている [Bùi M. T. 2001: 32-60]。1989 年の発掘では約 1.85 m 厚の遺物包含層が確認され、そのうち、表面から 1.1 m 深前後（発掘深度 1-11 レヴェル）まで、17 世紀後半の遺物が確認されている。そして、1.1-1.6 m 深前後で 16 世紀の製品が出現し（発掘深度 12-17 レヴェル）、15 世紀のものは 1.6 m から 1.85 m（発掘深度 18-23 レヴェル）で確認されている。従って、17 世紀以降の製品が確認できる層が非常に厚いことが分かる。調査者は、盛り土のように遺物を少量しか含まない層が厚く確認できたことを認識しており（Bùi M. T. 私信）、17 世紀に盛り土によるレヴェル上昇があったことが考えられる。

バートゥイは15世紀から16世紀末あるいは17世紀初頭までの生産が確認できるが、それ以後の時期に関しては確実な資料は発見されていない。カイは15世紀から20世紀までの連続した生産が確認されている。さらに上流のラオでは16世紀から17世紀末か18世紀初頭の実産が確認されており、その始まりは15世紀にまで遡ると考えられている [Tǎng B. H. 2000]。筆者のサーベイでもラオでは14-15世紀の遺物を確認している。

ゴイはカイ、ラオの間に位置した、堤防上の集落である。当集落では1999年の小規模発掘

[Bui M. T. and Nishimura n. d.] で、堤防と集落形成との関係がかなりはっきりした。現堤防道を挟んで3カ所の地点で試掘を行ったが、全ての地点において、最下層から出土するものは15世紀のものであり、その上に16世紀の遺物包含層が確認されている。また、そのなかの1地点では15世紀初頭の遺物を含む堤体と思われる盛り土層も確認できた。従って15世紀に現堤防道下に、より小規模の堤防があったことが確実視される。そして、別地点では16世紀包含層の上で、堤防建設のための堅くしまった粘土の盛り土層（約80 cm厚）が確認された。発掘面積が狭いため、この層中の遺物量は非常に少なく、堤防建設の年代を判断することは難しい。しかし、盛り土層直上の最上層部で1980年代の瓦を焼成した時の文化層を確認しており、17世紀から1980年の間に盛られたものであると限定できる。地元住民によれば、1980年代の瓦窯操業以前は人が住んでいなかったという。従って、当遺跡は17世紀には無人化し、堤防形成の盛り土層が17世紀から1980年の間に形成されたことになる。

これと同様な現象を確認できた地点に、左岸のティンコイ村のはずれで発見された陶磁器集中分布地点がある。当地点は窯業生産地ではなく居住遺跡と考えられるが、陶磁器の年代分布は14世紀から17世紀初頭に限られている。乾期の川水面より1.3 mほど高い地点で包含層が確認され、その層は現堤防の盛り土層下に入り込んでいることが確認された。17世紀半ばか後半以降の陶磁器が全くないことを重視すれば、17世紀半ばか後半以降に無人化し、その時に堤防建設が行われたと考えられる。

こうした、観察事実をまとめると以下のようなことが推察可能となる。

16世紀末あるいは17世紀初頭になって、現在の大集落間を結ぶゴイやティンコイなどの地点の小規模集落は廃棄されている。そして、窯業生産は17世紀半ばか後半以降、カイ、ホップレー、ラオの3集落のみ、盛り土による居住面の高レベル化を経て行われるようになった。そして、このような変化を引き起こしたものが輪中型堤防建設、あるいは、それに伴う河水面の上昇と考えたい。

III-3 フーラン

フーラン（Phù Lãng: 旧扶朗社）集落はバックニン省クエヴォー（Quê Võ）県のフーラン社に位置している。当集落も伝統的窯業集落で、現在、棺桶、甕や壺などの日常生活雑器を焼成している〔西野2006〕。集落はカウ川右岸の自然堤防上に発達しているため、細長い形状を呈している（図11）。現在集落の西側に残丘間をつなぐように建設された堤防が走っており、この堤防の起源は定かではないが1930年代、1960年代、そして2003年の3度にわたって改修が行われ、大規模化されている（西野私信）。従って、現在のフーラン集落は堤外地に位置し、雨期には窯業が不可能になるほど居住面が浸水したようである。

このフーラン集落の直下に過去の陶磁器生産を示す遺物包含層が確認されている〔Nishino



図 11 フーラン集落と窯址遺跡
出所：筆者作成。

2003]。遺物分析では生産が 13 世紀まで遡り、その後、現在まで連綿とした生産が続いていることが確認された。乾期の露頭面の調査で以下のことが明らかになっている。チュン村 (Thôn Trung) 地点では、乾期の河水面からわずかに 40-50 cm 高いところで 13 世紀から 15 世紀にかけての窯址、遺物包含層が確認できた。また、水面より約 2 m 高いところで 19-20 世紀の包含層が確認され、さらにその上に 2 m 近い盛り土層が現集落下に確認された。それから、ハ村 (Thôn Hạ) 地点では 13-14 世紀の包含層の上に、約 2 m 厚の盛り土層があり、さらに、その上層で 17 世紀の遺物包含層が確認できた (図 7-B)。従って、13-15 世紀においては、乾期水面から 50 cm 前後しか高くない面で操業し、その後 17 世紀のある時点で、盛り土による居住面の高レベル化を行っている。高レベル化は、その後も現在に続くまで行われているようで、これは堤外地の居住面が堤防の高レベル化に適応したものであろう。

III-4 バッチャンとキムラン

両集落は紅河本流の左岸の堤外地に南北隣り合って位置し、行政上はハノイ市ザラム (Gia Lâm) 県に所属している (図 12)。現在、両集落の間にはバックフンハイという水門付き運河があり、バックニン省、フンイエ省、ハイズオン省、そしてハノイ市のザラム県の排水・灌漑を行っている。

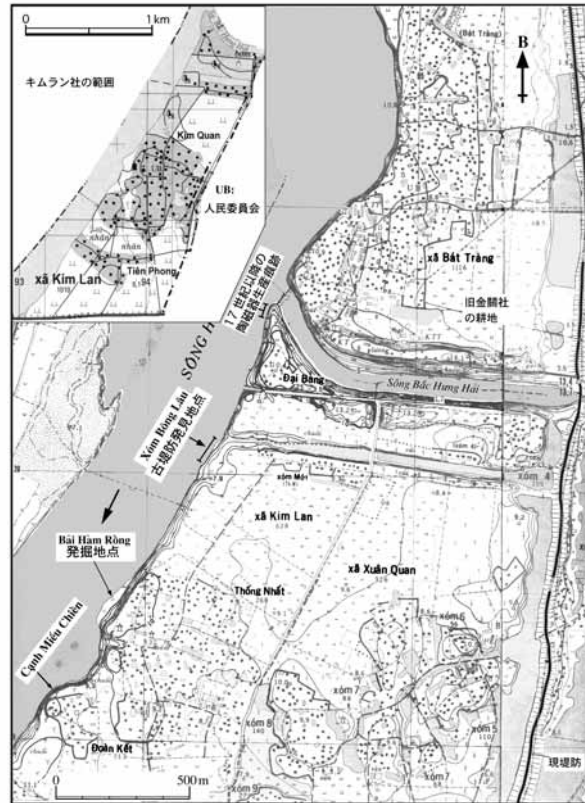


図 12 バッチャンとキムラン集落
出所：筆者作成。

バッチャン（Bát Tràng）社は伝統的窯業集落であるが、その歴史的遡源については考古学からの本格的な調査はいまだなく、文献・伝承史料から、その起源は李朝期にまで遡るという仮説が提出されている [Phan H. L. 1995: 13-17]。

バッチャンは紅河の攻撃斜面に位置しているため、1999 年の乾期に集落下の堆積状況を観察することができた。堆積状況は以下のものであった。現集落面と基盤の褐色粘土層の間に約 8 m の堆積を観察できるが、最下部約 50 cm は灰色粘土層で、15 世紀あるいはそれ以前の遺物が包含されている。その上 2.5 m は明褐色粘土、黄色粘土、灰色粘土が斑状に混じるもので遺物をほとんど含んでいない。この層の直上で 17 世紀後半以降の遺物を含む薄い層が確認された。そして、さらに上層（約 5 m 厚）では主に 20 世紀の遺物を主とした包含層と無遺物層が確認された（図 7-D）。

キムラン（Kim Lan：旧名金關）社は現在、バッチャンの窯業技術を導入し、陶磁器生産を行っているが、19 世紀以降は養蚕が盛んな集落であった。2000 年に集落脇の紅河左岸の川岸

で、過去の集落居住面（旧集落：バイナムゾン地点）が報告され、緊急発掘の対象となっている [Nishimura and Nishino 2003; 西村 2006a]。キムランの古老の記憶やフランス時代の地図資料をもとにすると、旧集落が位置している所は、現在より 200 m ほど紅河側へ張り出した地形に位置し、この張り出し部は徐々に水流に呑み込まれ、最終的に 1969 年から 1971 年の洪水で消滅し、下層部の旧集落面のみが残されたようだ。発掘では 11 世紀から 17 世紀半ばにかけての居住活動が、ほぼ同一レベルの面で確認されている。また、15 世紀の前半のある時点でほぼ居住痕跡がなくなり、16 世紀のある時点で再び居住が復活し、17 世紀末頃で旧集落地点は放棄されている。陶磁器生産に関しては 13-14 世紀に遺跡周辺で行われた直接証拠が発掘で確認されている [Nishimura and Nishino 2003] が、その後は 20 世紀末に至るまで復活することとはなかったと考えられる。現集落の生活面はこの旧集落生活面に比べ約 4-5 m 高くなっており、旧集落生活面は当然雨期の間は水面下にあり、乾期のみ地上に出現し、水面との比高差は最大 2 m ほどにまで広がる。また現集落面さえ、夏期にはほぼ水に浸かるほど紅河が増水する。

さらに興味深いのは、古堤防の痕跡がバックフンハイ運河と発掘地点の中間で確認できることである（2004 年 3 月調査資料）。2004 年年頭の乾期はまれにみる小雨気候となり、河水面が大幅に低下した。そしてキムランとバッチャンの現集落のほぼ真ん中に位置する紅河左岸で、乾期水面とほぼ同レベルの河床露頭面から木杭列のようなものが発見された。筆者とキムラン歴史研究会の踏査で、この杭列は図 13 のような配列、構造を持っていることが明らかとなっ

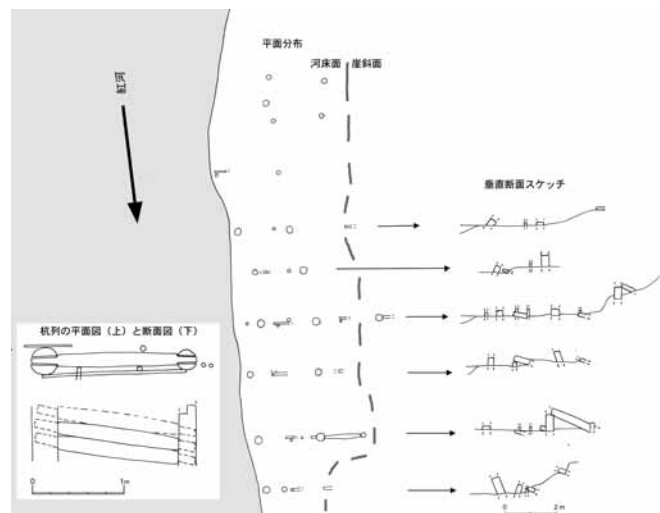


図 13 キムラン・ソムボンロウ地点の堤防杭列痕跡
出所：筆者作成。

た。具体的には、木杭と板を組み合わせた柵状のものが水流方向に直交するように土中に連続的に埋められていた。日本の古堤防発掘においても、愛知県名古屋市込高新田堤防や東海市浅山新田堤防〔北村 1998: 451-456〕では、堤防基底部に板柵をつくり、さらには横木を交え、土嚢などを積んで、堤体基部の決壊防御工事を行っているが、キムランでの確認例も、堤体の中央かあるいは川面側かという問題はあれ、堤体基部を決壊から防護し、堤防土の安定を図った基礎工事の一部と見て間違いあるまい。

この堤防痕跡は現河川流路に沿って 100 m 以上の長さで確認され、その方向から推測するなら、キムランの旧集落（バイナムゾン遺跡）範囲を紅河と分け隔て、バッチャン集落の東側へ向かって延びていた可能性が高い。共伴する陶磁器（17 世紀末-19 世紀）で判断すると、この堤防の存在期間は 17 世紀末から 19 世紀の間と考えられ、キムランが遅くとも 17 世紀末からある期間堤内地に立地し、バッチャンは堤外地に立地していたことが理解できる。ただし、共伴する陶磁器の年代から、建設時期は複数回あった可能性も考慮しておく必要がある。また、バッチャン集落東側の水田地帯（現在は沖積土壌の堆積で畑地化）は、過去においてはキムランの土地で、バックフンハイ運河の建設でバッチャン側に帰属している。また 17 世紀から 18 世紀においてバッチャンの陶磁器生産域は、紅河沿いに現在のキムラン集落北部に浸食する形で拡大しており、この現象は堤防建設によるキムランの堤内地化と並行したもので、堤外地化した紅河沿いに窯を建設したものであろう。これらの事実は、紅河本流が形成する自然堤防において、キムランはもともとバッチャンよりさらに東側の自然堤防列に位置していたことが理解できる。従って、17 世紀末か 18 世紀からある期間、キムランは堤内地、バッチャンは堤外地に立地していたことにも符合する。ただし、この堤防は最終的には、18 世紀から 20 世紀のある時点で、破堤をして放棄され、キムランは堤外地に立地することを余儀なくされたと考えられる。⁶⁾ その結果、堤外地に適した桑の栽培がさかんになったのではないかというのが筆者の推測である。『同慶地輿誌』の嘉林縣図〔Ngô Đ. T. *et al.* 2004: A. 537/1, f 67〕では、キムランの東隣のスアंकワン（春關社）が堤防の内側、バッチャン（鉢場社）が堤外地に描かれている。⁷⁾ 『京北風土記演国事』〔1807 年以前成立：Trần V. G. 1971: 21〕には、キムランは桑の栽培地として登場する。⁸⁾ 以上の事実から、キムラン、バッチャンともに 17 世紀の半ばか終わりに、よ

6) 前述したバイナムゾン地点で 15 世紀の居住痕跡がなくなることについては、キムランから分村した村（Kim Quan Thượng: 現 Gia Lâm 県 Việt Hưng 社）の、黎憲宗（15 世紀末）時代に洪水がひどいために分村したとの伝承と時期的に符合する。また、14 世紀にはバッチャンと北の塊（旧土塊社、現 Cự Khối 社の Thổ Khối）間の破堤も記録されており、洪水や破堤がおきやすい場所であったことが理解できる〔西村 2006a: 86, 90〕。

7) キムラン（旧名金關社）は描かれていない。

8) キムランの『北寧省嘉林縣金關社神跡』（漢喃院所蔵資料 4 Ea 7/12）では、9 世紀の高駢（安南静海軍節度使）がここを通過した際、桑の栽培を教えたことになっているが、これは後世の附会の可能性がある。

うやく堤防建設やそれに伴う居住面を高レベル化する現象が確認され、それらは河水面上昇に対応したもので、高レベル化自体はその後も継続している。従って、17世紀の半ばか終わりに、現在の紅河兩岸の堤防が閉鎖型堤防に変質し、河水面が高くなったと推測する。

土地所有においては、キムランは私田に対して公田比率がかなり高い集落であったことが記憶されている〔西村 2006a: 86〕。公田分布域は、現中心集落から南側の現在トゥモロコシなどを栽培している畑地が中心だったようだ。ただし、現在の土地利用が過去に遡るわけではない。革命以前は低域で水稻（モチ米）、中域で陸稲やトゥモロコシ、高域で桑の木が栽培されていたようだ。もちろん堤外地の川砂の頻繁な堆積が起きるところであるから、水稻栽培ができるような低所は非常に少なかったようだ。ただし、これはキムランが堤外地に位置している場合の農業形態であり、前述のように堤内地に位置していれば、全く異なったことが予想される。これは前述した17世紀末か18世紀の堤防建設が輪中型堤防とすれば、もともと排水域としてしか機能しなかった低域が堤内地化し、そこが農地（水田）として活用できるようになったことを意味しており、そのような可耕地は公田地帯となった可能性がすこぶる高い。筆者は、考古学調査と過去の土地所有形態から、17世紀におけるバックック、フーコック、タンコックでの輪中型堤防建設に伴う公田地帯の成立と同様な解釈が、キムランにも当てはまると推測する。

III-5 クアカムとトーハー

クアカム（Quả Cầm）村は、バックニン省ホアロン（Hòa Long）社のカウ川とグーフエンケー（Ngũ Huyện Khê）川の合流地点に位置し、トーハー（Thổ Hà）集落は、バックザン省のヴァンハー（Vân Hà）社カウ（Cầu）川蛇行部内側の堤外地（ポイントバー）に位置している集落である（図14）。両集落はカウ川を挟んで向かい合った関係になっている。クアカム集落下には13世紀から16世紀末あるいは17世紀初頭にかけての無釉陶器生産時に分厚い包含層が堆積している。現在、集落内には無釉陶器製造法を伝えた李朝代（1010-1225年）の皇女を祀った廟がある。

トーハーはつい最近まで、無釉陶器を生産する集落として有名であったが、現在是对岸のヴァン（Vân）村同様、酒造りが主に行われている。この村の無釉陶器の考古学的痕跡は、現在の集落が堤外地全面をほぼ覆っているため、正確には把握しえないが、17-18世紀にまで遡るのは確実である。興味深いのは、集落内で最も古式の建築を残している亭（Đình）、寺などの碑文が共に17世紀末の建設を伝え、亭や寺を中心に、家々が両翼に広がるように整然と並び、集落を構成するソム（Xóm：社や村より下位の集落単位）も、その両翼に均分区画されるように並んでおり、意図的な集落設計が読みとれることである。こうした集落形態は、長期間にわたって形成された集落ではなく、形成史の新しい集落の特徴と思われる。

ところで、両集落の周辺では河川沿いに、9-17世紀の窯址遺跡が多く確認されている（図

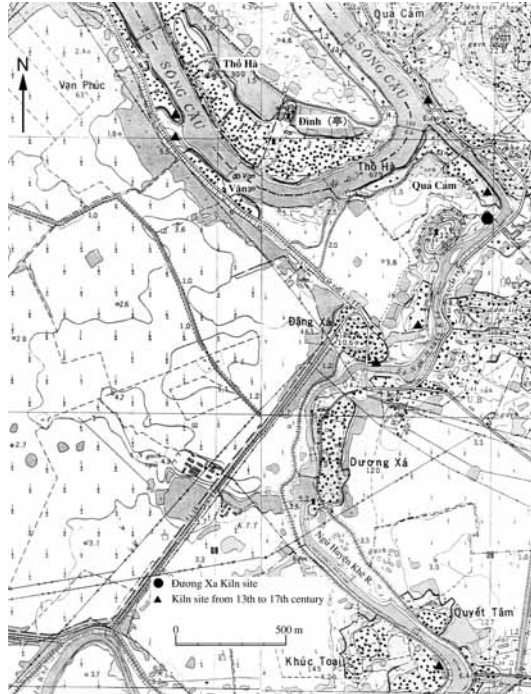


図14 トーハー集落と周辺

出所：筆者作成。

14) [Nishimura and Bui M. T. 2004]。そのうち、クアカムを含め7地点が16世紀末から17世紀を生産の最終年代とするもので、それ以上新しい時期の窯址は確認できない。つまり、17世紀のある時期にこうした川沿いの各窯業生産地は生産をやめ、トーハーでの生産に収斂した可能性が高い。実際に、クアカムからトーハーに住民が移住した伝承が残っており、現在でも、トーハーの氏族の一支派は、クアカム側に年に一度、氏族祭礼に赴くという。さて、この変化を引き起こしたのは何かが問題となる。

前述の各窯址遺跡は全て、現堤防の堤外地側で確認できるものであるが、その高度は乾期の河水面から50 cm から1 m ほどの高さで確認できる。これは当時の河水面が現在に比べ、低かったことを意味している。ところでトーハーはカウ川の堤外地に位置しているため、周囲の非残丘部と比べ相対的に標高が高く、最高位部で約8 m に達している。集落中央の亭も標高5 m のところに立地しており、17世紀末の亭建設時に5 m の標高が集落の居住面として確保されていたことがわかる。ちなみに、この亭の建設地面と、川を挟んだ東向かいのクアカム側の窯址地点の表面高度はほぼ同じであった。そして、現在のトーハーの集落高度が示すように、盛り土や沖積土、さらには陶器焼成窯の連続した破壊と建設で、次第にその高度が高くなり、

建設時から基壇を変えていない集落中央の亭が、結果的に周囲より低くなったと考えられる。従って、以前から居住自体は存在していただろうが、17世紀末がトーハーにとって集落形成史上の大きな画期である可能性が高い。

トーハーの集落自体はカウ川の蛇行部の内側に位置しており、周辺の窯址は対岸の河川攻撃面に位置しているところが多い。攻撃面側の地点では浸食が大きく、堤外地での安定した居住は望めないが、逆にトーハーの側では堆積作用が大きいのを気にしさえしなければ、広大な安定居住面を望める。堤防建設が先か、窯業集落の再編が先かは、考古学的な調査が進まない限り判断はできないであろうが、筆者は互いに時間的に近接し、相互影響を及ぼしていたと考える。トーハーとその対岸域は、水上交通の要所でもあり、今日、対岸のヴァンでは造船業が行われ、クアカムの方では水上生活者や水上運搬業を営む人たちが多くいたといわれている。堤外地は、立地が手工業生産とその運搬に適していることはいうまでもない。

よって、筆者は堤防建設による高水面化と堤外地の水上交通の利便性が結びついて、窯業生産地の再編が起きたと考えたい。

III-6 ハノイ市チャンティエン通り（旧百貨店）地点

レロイ（黎利：黎朝創始者）が湖に剣を投げ入れた伝説を持つホアンキエム（環剣）湖はハノイ市のシンボリック景観である。『洪徳版図』の昇龍城と周辺図（図15）ではこの湖からは南東に川がのび、紅河本流に合流している。ところが、1873年時点のハノイを表したとされる地図『HANOI 1873』（1916年印刷、図16）では、この河川は残り紅河本流とは切断され、環剣湖、水軍湖などの痕跡として残り、旧河川域は城堡（兼堤防であろう）と堤防が構成する一種の輪中空間に位置していることがわかる。つまり、この河川域は19世紀末までに埋められたことになる。また七畝湖がハノイ輪中内の悪水を蘇瀝江に排水する機能を備えていることも理解できる。2000年にこの旧河川上に位置する、チャンティエン通りとハンバイ通りが交差する旧百貨店地点（図16）の緊急発掘調査が行われた[Bui M. T. *et al.* 2001: 294-296]。発掘坑は旧河川を埋め立てた厚い埋土（褐色粘土層）を明

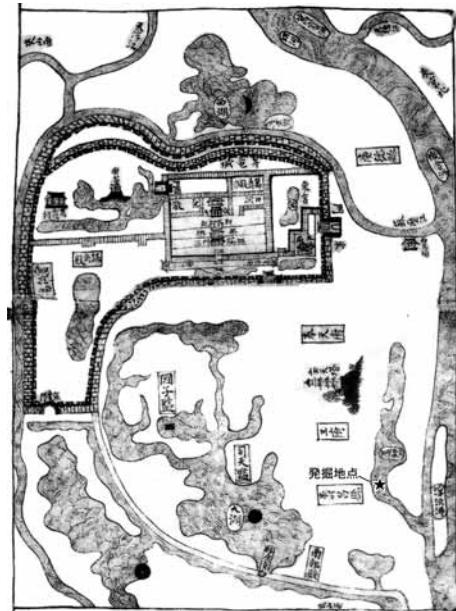


図15 ハノイと周辺『洪徳版図』

出所：[Tông Trung Tín 2006: 197, 漢喃院所蔵番号 A 2499]。



図16 ハノイ古地図『HANOI 1873』

出所：[Ngô Thiên Hiệu 2000]

らかにした。埋土の下は旧河川がまだ機能していた時の黒色あるいは黒褐色泥炭粘土層である。

出土遺物は17世紀半ばを中心とした貿易陶磁（中国・日本産）が数多く出土しており、当地点が17世紀段階で船着き場のような性格を有した可能性がある。おそらく、この時点で周囲の居住域の拡張や川の縮小化がはじまっていたと思われる。そして、この上の盛り土層は18世紀を下限とし、18世紀には川としての機能がなくなっていたことが推定される。17世紀末から18世紀にかけて、居住面の拡大、高レベル化が行われた一例であろう。

IV 結 論

紅河平原の複数の地点・地域において、集落と居住面形成、そして堤防との関係について述べてきた。研究方法論的には、日本の輪中型堤防卓越地帯の研究が非常に参考となる。⁹⁾

9) 東アジア、東南アジア史からの比較検討も必要であろう。行論で再三言及したように、紅河平原の堤防形成における現象は日本の濃尾平野などの輪中地帯の堤防形成史に同様な並行現象を見ること／＼

全体を概観して明らかなのは17世紀に突如活発化する集落の居住面高レベル化、面的拡大である。そして、これらの現象は輪中型堤防形成を前提にしないと説明できないというのが筆者の結論である。

ただし、その形成時期については地域あるいは輪中単位での時間差がありそうだ。バッククやチューダウの例は17世紀の初頭、トーハー、キムラン、ハノイの例では17世紀末の可能性が高く、紅河平原下流域が早く、中流域が遅いという傾向があるのかもしれない。濃尾平野の輪中形成史でも、古くから集落が成立していた自然堤防地帯において、築捨堤から輪中型堤防（懸廻堤）への移行が、低位部から高位部にかけて拡大する現象が指摘されている〔安藤1988: 320-325〕。ただし、筆者は17世紀を通じて輪中型堤防建設現象があり、場合によっては16世紀の末にまで遡るところもあるかもしれないし、18世紀以降も堤防建設は盛んであったと考えている。前後との差を重視するなら17世紀であり、この時期が、まさに現在我々が目にするような稠密な紅河平原の集落風景が形成され始めた画期と考える。

因みに文献史料では、1619年から1705年の間の詔令を集めた『国朝詔令善政卷之七』に河政関係の詔令が集められており、陳荆和〔1988: 252-253〕の議論では、1660年から1673年にかけて7度の堤防修築令が含まれている。これは、17世紀後半において破堤がしばしば起き、政権がその修築に対応する必要があったことを意味している。そして、陽徳二年（1673年）秋七月の申明培築堤路に、堤防修理の勅令がある。このなかに「水関」「水竇」が登場する。水竇は後に、阮朝の『大南会典事例』で、堤防存廃の議論を行った際に触れられており〔陳 同上論文〕、堤防の左右に水路を伴って設置されたもので、水田への入水機能や、入水遮断機能を持っていたことが理解できる。『同慶地輿誌』の河内省図〔Ngô Đ. T. *et al.* 2004: A. 537/5, f 5〕などでは、「竇口」が輪中型堤防の排水口として機能していることが絵図より認識できる。「水関」「水竇」共に水門の類と考えられ、排水、入水が可能な閉鎖型つまり輪中型堤防の存在根拠となる。ちなみに、明代の珠江下流域でも「竇」を輪中型堤防の水門として使っている〔王 2002: 177〕。前出の1673年詔令記事が、水関や水竇が付された最初の堤防記述であるなら、輪中型堤防出現時期の一つの傍証となり、筆者の推定する輪中型堤防出現期と齟齬をきたさない。¹⁰⁾

が多い。しかも、輪中型堤防が本格的に形成され始めるのが両地域共に17世紀であることを考慮すると、単なる並行進化の結果なのか、中国という当時の先進地域からの技術移転を通じた並行現象ではないか、といふかってしまう。中国の長江中・下流域では、宋代には輪中型堤防と考えられるものが出現し、その後、連綿と発展している〔長江流域規画弁公室長江水利史編集組 1992: 127-129〕。珠江下流域でも明代には輪中型堤（堤圈）が盛んに建設されている〔王 2002: 179〕。西日本の山口県などを中心に残る唐樋（水門）は、干拓時に潮水侵入を防ぎ、干拓地内からの排水を行うために17世紀に建設されたものが多く、中国からの技術導入といわれている。今後、水門にとどまらず、築堤や水路掘削等の土木技術史の比較研究を日・中・越で行ってみる必要もあろう。

10) 『大越史記全書』本紀洪徳15年（1484年）「定築田界蓄水令……繼今某処該内有破決防堤，秋田淹浸，勢可蓄水以作夏田。承憲二司責令府県州河堤勸農等官，合於潦水稍退之時，預為小民救飢之」

バックコックやキムランでは、堤防形成と集落史と土地利用の相関性から、輪中型堤防形成により、堤内低地が新田化された時に公田化され、結果として公田高比率地帯が成立している可能性が高い。沿岸部の防潮堤建設による土地の囲い込みによる新田開発でも、国家側が主体的に堤防建設を行っている場合は、公田が多く形成されているようだ〔嶋尾 2003: 173-174〕。また、17 世紀後半から 18 世紀にかけて、堤防修築の際に付近の社を動員したり、税負担を決める勅令が出されている〔Phan Khánh 1981: 43-47; Đỗ Đức Hùng 1997: 68〕。さすれば、バックコックやキムランでも、鄭氏政権の主導のもと各社を動員して堤防建設を進めたと想定するべきなのであろうか。堤防形成と集落形成史を絡めて、土地利用を理解する視点は、従来のヴェトナム土地制度史研究ではなかったもので、今後、堤防建設の計画・管理・実行者なども含めて、各具体事例での検討が必要である。

また、桜井〔1987a: 141-180〕は『洪徳版図』『国朝官制典例』などの史料分析から、紅河平原域の集落数が 15 世紀から 18 世紀にかけて、社 (xã) 数はさほど変化しないのに村 (thôn) 数が大きく増加していることを指摘し、そこに社からの分村の可能性を推測している。筆者はこの村数増加をおこした主因の一つが、輪中型堤防により、堤防内の低湿地が新たな居住地、耕地として利用可能となったからだと考える。その結果、堤防内の既存社から分村して、新集落が成立することは非常に蓋然性が高い。

さらには、堤内地と堤外地では居住面形成法において、差があることが明らかとなった。堤内地では、日本の水屋建築のように、各家単位で盛り土をして高位面を形成して、高水位に対応すればよい。しかし、堤外地の場合、日本のように石垣を使って、堅牢な水屋建築を築けるような条件や伝統がない場合、集落全体で高位居住面を維持して、高水位に対応しなくてはならない。また、堤外地の場合、河川の堆積作用も直接に被るわけであるから、盛り土をせずとも自然堆積で高レベル化することが考えられる。河川蛇行部の滑走斜面側のトーハーなどはその典型例だろう。従って、堤外地の場合、河川の堆積作用と盛り土両方による高レベル化と考えた方がよい。

また、堤外地にしばしば窯業集落が立地しているのも興味深い。原料（陶土や薪）の搬入、製品の伴出共に、つい最近まで水運が中心であり〔e. g. 西野 2006〕、堤外地というのは窯業集落

計、相視地勢、隨其便宜、督責鄉民、培築田界、要令蓄水以作夏田」という記事を、桜井〔1989: 282〕は、堤防決壊により雨期作田が冠水した場合に、田畦を高め洪水水を残し乾期作田の用水にまわすと訳し、それらから、当時、大堤防列や輪中型堤防が存在したことの根拠に挙げている。大堤防列に関して筆者は否定しないが、輪中存在の理由に挙げることに 대해서는 懐疑的である。なぜなら、輪中があれば水門を開けない限り、輪中内に降雨や洪水水が溜まることになり乾期作の水利用には困らないであろう。むしろ、この記事は、逆に当時の堤防は馬蹄形輪中のような非閉塞型の堤防で、田界を作るなどして、水溜まりを作らねば、乾期に堤防の非閉塞部分から水が流失していたと推定する。

の絶好な立地なのであろう。そして、窯業集落だけでなく、伝統的手工業集落にはそうした堤外地に好んで立地している場合が他にもある。その一つがキムランなどに見られた養蚕業である。これは養蚕業に必要な桑の栽培に堤外地が適していること〔安藤 1975: 243-248〕が関係している。こうした産業は堤外地の有利性を利用しており、輪中型堤防形成がこうした手工業集落の立地を限定したり、あるいはその專業度を強めさせた可能性とてあろう。輪中型堤防形成により本格化する堤内地と堤外地の地形的格差はそこに立地する集落の性格も変えていったと考えられる〔西村 2006a: 88〕。今後のヴェトナム史や集落研究で注意すべき課題である。

謝 辞

史料入手にあたって岡田雅志氏にお世話になった。記して感謝する。

参 考 文 献

略語

NXBKHXH: Nhà Xuất Bản Khoa Học Xã Hội, Hà Nội:

NPH: Những phát hiện mới về khảo cổ học Việt Nam. . ., Hà Nội.

安藤万寿男. 1988. 『輪中——その形成と推移』大明堂.

—— (編). 1975. 『輪中——その展開と構造』古今書院.

陳荆和. 1988. 「『鼎耳』小考」『創大アジア研究』9: 241-255.

長江流域規画弁公室長江水利史編集組. 1992. 『長江水利史』竊木孝治 (訳). 古今書院.

春山成子. 1999. 「ハンドオーガーを用いた簡易ボーリング調査と空中写真を用いた微地形分類について」『百穀通信』(ベトナム村落研究会) 9: 207-219.

春山成子; 平出重信; 堀和明; 田辺晋; 齊藤文紀; Le Quoc Doanh. 2000. 『電気探査を用いたデルタ微地形の環境復元——北部ベトナムの紅河デルタを事例地域として』. 早稲田大学先端科学研究所テクニカルレポート No. 2000-15.

伊藤憲司; 高橋幸仁. 1996. 「堀田の築立と消滅過程」『変容する輪中』伊藤安男 (編), 37-66 ページ所収. 古今書院.

北村和宏. 1998. 「愛知県の治水・利水遺跡について」『治水・利水遺跡を考える——人は水とどのようにつきあってきたか』(第1分冊 資料編): 436-464. 東日本埋蔵文化財研究会.

河野泰之; 柳澤雅之. 1996. 「ナムディン輪中の水利」『百穀社通信』7: 1-27.

桃木至朗. 1991. 「書評論文 桜井由躬雄. 『ヴェトナム村落の形成——村落共有田=コンディエン制の史的展開』」『東南アジア——歴史と文化』20: 77-100.

中沢正樹. 1997. 「百穀社地簿にみる處の位置関係とその比定」『百穀社通信』7: 1-51.

西村昌也. 2006a. 「キムラン研究覚え書き1——川べりの手工業專業集落の歴史地理的概要」『ベトナムの社会と文化』5: 80-93.

———. 2006b. 「紅河平原とメコン・ドンナイ平原の考古学的研究」東京大学大学院人文社会研究科提出学位請求論文.

———. 2006c. 「2000年度と2002年度夏期バック考古学班調査の報告——Phú Cốc地点の試掘調査概報, ならびにバックと周辺の居住史に関する覚え書き」『百穀社通信』12: 30-42.

西村昌也; 西野範子; チン・ホアン・ヒエップ; グエン・クオック・ホイ. 1998. 「1997年度夏期考古学調査の概報」『百穀社通信』8: 159-180.

西村昌也; 西野範子; 平野裕子; チン・ホアン・ヒエップ; 向井互. 2000. 「1998年度と1999年度の夏期考古学調査の概報」『百穀社通信』10: 95-145.

西野範子. 2006. 「フーラン村における窯業の生産・流通システムの変遷」『ベトナムの社会と文化』5: 3-

55.

- 西野範子；チンホアンヒエップ. 2006. 「Xóm B 地点の試掘概報」『百穀社通信』12: 43-47.
- 王双懷. 2002. 『華南農業地理研究』中華書局.
- 桜井由躬雄. 1987a. 『ベトナム村落の形成——村落共有田＝コンディエン制の史的展開』創文社.
- . 1987b. 「ベトナム紅河デルタの開拓史」『稲のアジア史』2: 235-276.
- . 1989. 「陳朝期紅河デルタ開拓試論 1——西沱濫源の開拓」『東南アジア研究』27 (3): 275-297.
- . 2000. 「紅河デルタにおける地域性の形成」『地域形成の論理』坪内良博（編），263-299 ページ所収. 京都大学出版会.
- 佐藤甚次郎；佐々木史郎；大羅陽一. 1987. 「荒川流域における水塚」『歴史地理学紀要』29 (治水・利水の歴史地理): 127-148.
- 嶋尾 稔. 2003. 「紅河デルタ沿海部開拓史研究の概観」『紅河デルタの環境変動と環境評価』春山成子（編），171-188 ページ所収.
- Bùi Minh Trí. 2001. *Gốm Hợp Lễ trong phức hợp gốm sứ thời Lê, Luận án tiến sĩ lịch sử*. Hanoi.
- Bùi Minh Trí; Nishimura, Masanari; and Đặng Đình. 2003. Thế và Nguyễn, Duy Cương. Khai quật lần thứ 6 di chỉ gốm sứ Chu Đậu. *NPH* 2002: 378-382.
- Bùi Minh Trí; and Nishimura, Masanari. n. d. 3/1999. Khai quật di chỉ gốm sứ Ngói, Bình Giang, Hải Dương, tháng Unpublished report submitted to Institute of Archaeology.
- Bùi Minh Trí; Tống Trung Tín; Phạm Như Hồ; Nguyễn Mạnh Cường; Nguyễn Đoàn Thuận; and Nguyễn Văn Hùng. 2001. Báo cáo sơ bộ kết quả khai quật khảo cổ học tại Trung Tam thương mại Trần Tiên, Hà Nội. *NPH* 2000: 294-296.
- Bùi Văn Tam. 1997. *Những nét tiêu biểu về văn hóa làng Bách Cốc*. Tư liệu kỷ niệm khánh thành đền thờ Thái Phó Bình Quận Công Bùi U Đài. Bách Cốc. Bách Cốc. (Mimeo graphed).
- Đỗ Đức Hưng. 1997. *Vấn đề trị thủy ở đồng bằng Bắc Bộ dưới thời Nguyễn thế kỷ XIX*. Hà Nội: NXBKHXH.
- Dumont, Rene. 1935. *La culture du riz dans le delta du Tonkin*. Societe d'edition: Paris. (Reprintd in 1995. Prince of Songkla University, Thailand).
- Gourou, Pierre. 2003. *Người nông dân châu thổ Bắc Kỳ*. Translated by Nguyễn Khắc Đạm, Đào Hùng. and Nguyễn Hoàng Oanh. Hồ Chí Minh: Nhà xuất bản trẻ. (Original text Gourou Pierre. 1935. *Les paysans du delta Tonkinois: étude de géographie humaine*. Paris: Editions d'Art et d'Histoire).
- Ngô Đức Thọ; Nguyễn Vn Nguêyn; and Papin, Philippe. 2004. 『同慶地輿誌』 Nhà xuất bản bản đồ, Hà Nội.
- Ngô Thiên Hiệu, ed. 2000. *Lịch sử Hà Nội qua tài liệu lưu trữ tập 1: Địa giới hành chính Hà Nội từ 1873 đến 1954*. NXB Văn hóa thông tin.
- Nishimura, Masanari; and Bui Minh Trí. 2004. Excavation of Duong Xa Kiln site, Bac Ninh Province, Vietnam. *Journal of Southeast Asian Archaeology* 24: 91-131.
- Nishimura, Masanari; and Nishino, Noriko. 2002 Archaeological Study of the Settlement Formation in the Red River Plain: A Case of Bach Coc and the Surrounding. In *Paper Collection IIAS Workshop Vietnamese Peasant's Activity, an Interaction between Culture and Nature*, edited by Yumio Sakurai, pp. 16-27.
- . 2003. Chronological Sequence for Late 14th to Early 15th Century Vietnamese Ceramics from Bai Ham Rong, Kim Lan Site and Ho Citadel. *Journal of Southeast Asian Archaeology* 23: 145-163.
- . 2004. Báo cáo khai quật chửu chấy lần thứ hai ở di chỉ Bãi Hàm Rồng, Kim Lan (huyện Kim Lan, thành phố Hà Nội). Báo tàng lịch sử Việt Nam, Hanoi.
- . 2006. Nghiên cứu khảo cổ học về sự hình thành làng xã ở đồng bằng sông Hồng: Trường hợp làng Bách Cốc và xung quanh. *Thông tin Bách Cốc số đặc biệt* (ベトナム村落研究会): 17-37.
- Nishino, Noriko. 2003. Gốm sứ Phù Lãng. *Những phát hiện mới về khảo cổ học Việt Nam năm 2002*: 423-426.
- Phan Huy Lê. 1995. Lịch sử hình thành và phát triển làng gốm Bát Tràng. In *Gốm Bát Tràng thế kỷ 14-19*, edited by Phan Huy Lê, pp. 13-18. Hanoi: Nhà xuất bản thế giới.
- Phan Khánh, ed. 1981. *Sơ thảo lịch sử thủy lợi Việt Nam*. Hanoi: NXBKHXH.

- Sakurai, Yumio. 2002. Revolution and War: Modern History of Vietnam from Villagers' Perspective. In *Paper Collection IIAS Workshop Vietnamese Peasant's Activity, an Interaction between Culture and Nature*, edited by Yumio Sakurai, pp. 88–183. Leiden.
- Tăng Ba Hoanh, ed. 1999. *Gốm sứ Chu Đậu*. Kinh Books.
- Thanh Hương; and Phương Anh. 1974. Hà Bắc ngàn năm văn hiến. Tập 1 : các di tích lịch sử, kiến trúc và nghệ thuật. *Ty văn hóa Hà Bắc, Bắc Giang*: 54–64.
- Tổng Trung Tín, ed. 2006. *Hoàng thành Thag Long*. NXB Văn hóa thông tin, Hà Nội.
- Trần Văn Giáp, ed. 1971. *Phong thổ Hà Bắc đời Lê: Kinh Bắc phong thổ ký diễn quốc sự*. Ty văn hóa Hà Bắc, Bắc Giang.